〔特別展によせて〕

蕪村の手紙

私が蕪村の絵に強く惹き附けられた切掛けは、「夜色楼台」を見たことであります。それまで、蕪村といえば、俳人でありかつ南画風の絵を描く文人画家ぐらいにしか思っていませんでした。そうして文人画といえば、淡彩の瀟洒な水墨画に漢詩の賛が必ずあって、それが訓めなければなにか見る資格がないように思えて、たいへん窮屈な絵だと思っていました。しかし「夜色楼台」をはじめて見たとき、雪景色の絵を見ているのに実に暖かな気分になり、その自在で自由な筆使いに何んとも言えぬ柔かな心を感じたのでした。

それ以後、機会あるごとに蕪村の絵を見てきましたが、絵以外にもう一つ、私が蕪村に惹かれるようになった原因があります。それは彼の手紙であります。全集に収められている蕪村の手紙を読もうと思った時に、私が予想したことは、江戸時代の「候文」の手紙だから、きっと難しい語句がたくさん使われていて、形式ばった味気ないものに違いない、ということでした。ところが読んでみると、ユーモアたっぷりなのがあるかと思うと相手はばからず直言を呈するものがあり、また自らの貧乏を率直に訴えたものもあるといったように、正に蕪村その人を眼のあたりに見る思いがして、興味が尽きないのであります。ここにその一端を挙げてみようと思います。

先ず最初は、画の催促の手紙を持ってきた使いの者に、返事を託したときのものです。

御使殊の外またせ申候。其ゆゑは娘それがしにむかひ過言（口ごたえ）いたし、扨々にくき者と存候へども、骨肉の愛情ゆゑ異見（意見）真最中、それにて使隙入此訳に候。画は明日中にしたため可申候。（中略）節季（おおみそか）ちかく候へば、何にても書遣し可申候。さだめし謝宝（礼金）車馬にて御おくり被下候はんとたのしみ申候。先日御約束の奈良茶めし、いかがいかが。老人のものわすれはさることなれども、貴子の如き若き人のものわすれ、近頃きこえぬ事に候。礼は先日たんと言置たる事に候。礼をとりかへさんや。いかがいかが万々。

若い門人に宛てたものとはいえ、ユーモアもシャレもあるまことに愉しい手紙ではありませんか。これを読んだとき、私は思わず楽しくなりましたが、果してこんな手紙を書いて送る相手が自分にあるかどうかと考えてみた時、急に寂しい気持になったものです。

次は伊丹の造酒屋の門人から酒と鮎を貰ったのに対する礼状です。

酒一樽　いな河の小魚

右両品共ニ六月六日夕がた京着（京都に到着）いたし候。神事（祇園祭）之間ニ合　糸存候。しかし、いな河の魚ハ腐れただれ候而、臭気甚しく、一向やくニ立ず四ツ辻へすてさせ申候。捨テニ行者鼻をふさぎ、顔を背け候而持出候。飛脚屋より持参り候男も、道々くさきニこまり候よし小言を申候。いか様炎熱之時節、所詮京迄ハ持がたく候。向後（以後）暑中ニ河うをなど御登せ被成候義御無用ニ御坐候。切角御親切ニこころを御つくし被成候而も、用ニ立不申候。其上駄賃の費、彼是以無益之事ニ御坐候。御存意之ほどハ甚かたじけなく候。右之義　申　進候事、いかがニ存候へ共、向後御心得のため二御座候故、無遠慮申進候。　以上

行間にユーモアを漂わせてはいるものの、中途半端な遠慮を一切せずに、行きなり相手の懐の中に飛び込んで直言する語気を読ていますと、ある種の蕪村画に見られる「不思議な凄み」が思い出されます。

涼夜兎図　蕪村筆

最後に蕪村が画料を催促している手紙を挙げてみましょう。普通蕪村は文人画家といわれ、文人画家の手紙の中に金の話が出てくるのを不審に思われる方もあるかも知れません。しかし本当は、蕪村は絵を売って生活していたのです。

（前略）先達乙総子たのミの画屏山水、揮毫（描く）いたし相下候。定而相達候半と存候。右画料なども貴子おすすめ被下、五月節（節句）前ニ御登せ被下候様ニ御心を被付可被下候。御両子方へハ返納之物（借金）も有之候而、心頭ニかかり候へ共、右長病家内之困窮、言語道断ニ候。御察被下候而、きぬ地画料等も御取集早々御登被下度候。是ハ他へハ云ハれぬ事ニ候。貴子ハ格別故、覆蔵なしニ申進候。乙ふさ子へもくれぐれ御取持、御ことばを被添可被下候。扨もくるしき世の中ニて候（後略）

安永五年四月十五日付霞夫宛の手紙であります。蕪村は門人を通じて絵を売ることが多かったようですが、その門人に対して、自らの生活苦を少しも隠すことなく話して、画料を催促しています。それも一度だけではありません。乙総から屏風の画料が届かないとなると、続く六月二十八日にはもっと凄じい手紙を出しています。

（前略）乙ふさ子方屏風、したため相下候。其後一向届いたとも沙汰無之候。いかが之思召ニ候哉無覚束候。定而先達之御さし引（借金）等其有之候故、其分ニ返済のつもりに而之慰召歟と察候。それハ至極御尤ニ奉存候。しかれ共愚老義、去年中より当春へかけ長病、既ニ黄泉之客（死ぬ）と存候程之仕合にて、当春へ至り候ても一向画業打すて置候故、家内物入其外、生涯之困窮、御察可被下候。それ故先ヅ先達之さし引事ハしばらく御延置被下候而、少ニても画料等御登せ被下候ハバ忝奉存候。左様無之候而ハ、夜半亭持かね候。御両子之義ハ、別而親交之社中（仲間）と力ニいたし、老心を養ひ申候。此義御垂鑑（推察）被下、乙ふさ子とよろしく御さうだん被下、盆前無間違御登せ被下候様ニ、草天（ひでり）ニ雲を待心地ニ候。（後略）

このような手紙を読んでいて私が特に感じることは、一見、率直に心情の吐露しているように見えながら、その実、心の奥にはまことに屈折した思いが籠っているな、ということです。敢て言うならば、他人の嘘よりも自分の嘘に非常に敏感な心の持主のように感じられるのです。それでいながらというか、それだからこそというか、決して思わせぶりなことは言わず、神経質な詮索は毫も見せないのです。形式や衒いを一切捨てたこのような精神は、あの「夜色楼台」の画面を自由に生き生きと走る筆線にありありと現れている。と言えるかも知れません。

（早川聞多）

季刊 美のたより No.64
昭和58年 9月 1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.